

共生・公正・創造



ユニオン・EYE

<http://www1a.biglobe.ne.jp/jrtu-EWU>

ジェイアール東日本労働組合
〒108-0014 東京都港区芝5丁目33番36号
TEL(NTT)03-3453-2107 (JR)057-2290
発行者/今井 伸 編集者/平 憲治



“テロリストに乗っ取られた”JR東日本の真実”

「マングローブ」ダイジェスト版 第18回

あの「週刊現代」連載記事が【マングローブ】という本になった。本紙は筆者（西岡研介氏）の了解を得て、『謎に包まれた非合法集団とJR東日本の抜き差しならぬ関係』をダイジェスト版として紹介することとした。

インタビュー (3) 革マル派の学園支配を断ち切った8年間の闘い

前早稲田大学総長・奥島孝康氏

しかし当初、早稲田大学当局は、法学部の「期末試験強行実施」にきわめて冷ややかだったという。奥島氏が当時を振り返る。「試験日までの他学部や（早稲田大学）本部の反応は、『そんなバカなことはやるな、どうせ潰されてしまう』というものでした。約30年に及ぶ革マル派支配で、早稲田大学は完全な『敗北主義』に陥っていたんです。さらには彼ら（革マル派）シンパの教授もいた。というのも、革マル派がそれまで早稲田を支配できたのも、30年もの長い時間をかけて、教授のなかにそういうシンパを作ってきたからなのです。どの時代も、脅しだけの恐怖政治は長続きしません。実は早稲田には、共産党嫌いで、『民青（日本民主青年同盟・共産党の青年部組織）よりは革マルのほうがまし』という考えをもった先生も多かった。実際、革マル派はそれこそ、敵を攻撃するときには徹底的にやるけれども、ふだんは真面目で、まともに話してみると、爽やかな者たちが多いんですよ。信念とか理想にかけていることが感じられる。これに対し、他セクトの連中のなかには、いわゆる世俗的な、一方で左翼の理想を語りながら、一方で名誉欲とか金銭欲に、ギラギラした者が多かった。そういった意味でも、革マル派にシンパシーを感じている先生は結構いました。革マル派はそうやって学内に、自分たちを擁護する、あるいは自分たちを擁護しないまでも敵対しない勢力をずっと作ってきた。だからこそ、30年も早稲田を支配することができたのです」そして翌年、早稲田大学第14代総長に就任した奥島氏は、本格的に革マル派追放に乗り出す。まず着手したのは、革マル派の「資金源」の遮断だった。95年、商学部は、革マル派系の商学部自治会の公認取り消しを決定、さらに商学部が行っていた自治会費の代行徴収もやめた。商学部では、学生一人あたり年間2000円、総額で年間1000万円以上の自治会費を代行徴収していたが、用途が不明朗で、革マル派の資金に流用されている疑惑が、長年にわたって煙り続けていたのだ。さらに、その2年後の97年、奥島氏はついに「日本一の大学祭」といわれた「早稲田祭」の中止に踏み切る。早稲田祭を主催する「早稲田祭実行委員会」も、60年代後半から革マル派の支配下にあり、入場料の代わりにパンフレットを販売。その代金をすべて徴収していた。そして、そのパンフレット代や広告費、さらには大学から出る1000万円の補助金の用途も、やはり不明朗で、革マル派に流れている疑いが強かった。奥島氏が再び語る。「大学が、教職員に配るために、パンフレットをまとめ買いしていることを知って愕然としました。大学が率先して、革マル派に資金提供をしていたのです。また革マル派は『文化団体連合会』というサークルの元締め団体も押さえていました。早稲田では、公認サークルに年間35万円の助成金を出していたのですが、そのなかのいくつかは、彼らのダミーサークルだった。仮に20団体の革マル派系の休眠サークルがあったとすれば、年間700万円がそのまま彼らに流れていたことになる。この助成金も2000年にいっさい廃止しました」

【マングローブ（講談社）P.322～P.324】